

EurekaXIII

六年制通信 No.5 令和7年5月1日(木)号

時を間違えてはいけない

学生時代にある聖書講読の講座に参加した時、講師の先生が大声で旧約聖書のイザヤ書を朗読されました。聖書の英語についての勉強と思っていたのに、それについては一切触れず、陶醉した表情で延々と音読するわけです。これが非常にお上手でね。しかもあまりの迫力に驚きました。そして、十分満足されたのでしょうか、はたと聖書を閉じられて「諸君、わかりましたか。どうか聖書は文語訳で読んでくれたまえ。声に出して読んでくれたまえ。口語訳は、あんなものはいかん。あれでは心に響かん。せめてイザヤ書だけでも文語訳で読んでくれたまえ！」と言って講義を終えられました。予想していた講義とは全く違いましたが、先生の趣旨はよくわかりました。その帰り道に古書店で文語訳の聖書を買ったのを覚えています。今はもう、その先生のお顔もお名前も忘れてしまいましたが、その時買った聖書は今も手の届くところに置いてあり、大げさに言えば枕頭の書の一つになっています。

聖書の中で君たちにぜひ知ってほしいのは、旧約聖書の「伝道の書」にある「すべての物事には時がある」というフレーズですね。これは第3章1節から8節までに見られます。「生まれるにも死ぬにも、植えるにも植えたものを抜くにも、泣くにも笑うにも、悲しむにも踊るにも…、すべての物事には時がある」そう書いてあります。文語だと遥かに格調高いですから、いつか読んでみて下さい。若い時にこれを読んでも、そりゃそうでしょうね、くらいにしか思わないかもしれませんが、若い時を振り返る年齢になると、このフレーズは真実その通りだと思えてきます。いや、若い人でも、毎日の生活の中で右に行くか左に舵を切るか迷うことがよくあるでしょう。しかし選択の難しさもさることながら、その時期が大切だと聖書は言っているわけです。これがなかなか難しいわけですね。右か左かどちらに行くべきか、これも重要だろうけど「いつ行くか」が大切だ、そういう視点ですね。何事にもタイミングが大切だ、と言った方が皆さんにはピンと来るのかな。

やるべきときにやらず、あとで後悔する、そういう意味の「後の祭」や「手遅れ」あるいは「時すでに遅し」のような言い回しは結構ありますね。よほど私たちはこの手の経験が多いのでしょうか。古い表現だと「証文の出し遅れ」なんてあります。何となく理解できると思います。「喧嘩過ぎての棒千切り」これは難しそうですね。自分で調べてみましょう。こういう言葉は使う人が少なくなってくると自然と失われていくのでしょうかね。君たち、頑張って使ってください。ただし「12月26日のクリスマスケーキ」は「婚期を逸した売れ残り」という品のない悪口ですからね。

私は「六日のあやめ、十日の菊」という表現が好きです。これも学生時代に先生から、どういう状況だったかは忘れましたが、「そんなこといまさら言っても六日のあやめだね」と言われ、私が意味を取りかねていると、続けて「十日の菊って聞いたことないかね。つまり節句の…」と教えていただいたわけです。季節の節目に五節句を祝う習慣があるのは皆さんも知っているでしょう。七草（一月七日）をはじめ、桃の節句（三月三日）、端午の節句（五月五日）、七夕（七月七日）、菊の節句（九月九日）ですね。端午の節句は鯉のぼりだけではなくて、菖蒲湯につかる習慣もあるのですが、今年そういうお風呂に入る予定の人はいませんか。それで端午の節句は菖蒲の節句とも言うのです。菖蒲は「しょうぶ」、つまり「あやめ」のことです。五月五日に菖蒲湯をつかわずに、六日に入っては意味がない、それで「時機を逸した」ことを「六日のあやめ」と言うのです。内容はマイナスのイメージですが、表現は美しいと思いませんか。「六日の菖蒲」と書いてもいいでしょうが、発音は「あやめ」です。菊も同じことです。十日に菊を浮かべたお酒をのんでもダメなんですね。この二つを合わせて「六日のあやめ、十日の菊」ができたわけです。この言葉を初めて知った時は、意味はともかく本当にきれいな表現だと思いました。皆さんも、日常の語彙の中にこういった表現を加えていって、使ってくださいね。

もちろん、「六日のあやめ、十日の菊」は言われずに越したことはないけれど、私たちの普段の言動には該当するケースがたくさんあるように思います。時を誤っては意味がない、このことを心にとめておきましょうね。

今週のおすすめ

・穂積陳重 『法窓夜話』 （岩波文庫）

「ほづみのぶしげ」と読みます。江戸末期にお生まれになり、日本の法学を作った方と言っていいでしょう。息子の重遠（しげとお）も有名な法学者。少し前のNHKの朝ドラ「虎に翼」は主人公が日本で初めて女性裁判官となった人物でしたが、あれにも重遠先生がモデルとなった高名な法学者が出ていましたな。重遠先生、奥様のお父様は児玉源太郎です。これで、「おっ」とならないとすれば歴史の勉強が足りませんな。陳重はおしゃべりだったそうですが、重遠が父陳重の語る法律よもやま話を記録してまとめたのがこの本です。丁度百話あります。どれも面白いですよ。

一つだけ、超有名なお話を紹介しましょう。第26話「死の骰子」です。骰子はサイコロのこと。17世紀の半ばのドイツ、ある美少女が殺害され、容疑者が二人逮捕される。どちらも自分が犯人ではないと言い張る。そこでフリードリッヒ公は二人に二個の骰子を振らせ、合計の数が少ない方を処刑することにした。一人目が振ると二つの骰子はともに六を出している。つまり最高得点、もう負けることはない。しかし二人目が振ると一つは六を出し、もう一つの骰子は何と二つに割れて六と一を出していた。これを見て、神意を感じ取った一人目の男が罪を白状し、処刑されたそう。ま、こんな話が満載です。GWに何話でもいいのでゆっくりと読んでみて下さい。

BGMは 伊藤由奈 の *Endless Story* でした…。